

文革期文芸の一側面

——映画『海霞』をめぐる問題——

辻 田 智 子

要 旨

謝鉄驪（1925-）は北京電影製片廠所属の監督である。文革時期5本の革命模範劇の映像化に関わった。小説『海島女民兵』を基に脚本『海霞』を書き上げ、自ら監督して映画化しようとする。しかし革命模範劇の映像化を命じられたため、『海霞』の撮影は銭江らに託し、折に触れて撮影の指導をする。

1975年1月にフィルムが完成し、文化部が審査するが、「三突出」の原則を守っていないなどの理由で上映が許可されなかった。また審査前のフィルムを周恩来をはじめとする指導者が見たことによって、問題が複雑化する。映画の表現上の問題が政治問題に格上げされ、謝鉄驪らは批判の対象となる。1975年7月頃から文芸政策が緩和される動きが起きると、鄧小平の主導で中国共産党中央政治局による『海霞』の審査が行なわれ、7月31日、『海霞』の上映が決定される。

上映決定後、江青グループは『海霞』を鄧小平と結びつけて批判運動を展開しようとするが、直接的な関係を示す事実が乏しく大々的に展開できずにいた。大規模な批判大会を計画していたものの、1976年10月6日の「四人組」逮捕によってその計画は実現不可能となり、文革終了直後『海霞』の「名誉回復」がなされる。

本稿は『海霞』の制作から審査、上映許可までの過程、上映許可後の動向について事実関係を明らかにし、考察しようとするものである。それによって文革期の文芸政策がどのように行われていたのかの一端を解明したい。

キーワード：『海霞』、謝鉄驪、三突出、四人組、文化大革命

1. 問題の所在

文化大革命は1966年5月16日の中国共産党中央委員会による「通知」によって正式に始まったとされる。「五・一六通知」と称されるこの通知には次のように述べられている。「全党はかならず毛沢東同志の指示に基づいて、プロレタリア文化革命の大旗を高くかけ、例の反党・反社会主義のいわゆる「學術権威者」のブルジョア反動思想を徹底的に暴露し、學術界、教育界、報道界、文芸界、出版界のブルジョア反動思想を徹底的に批判し、これらの文化領域における指導権を奪取しなければならない¹⁾。文芸界はその批判対象に挙げられ大きな影響を受けた。周知の通り中国語の「文芸」は文学と映画、演劇、美術などの芸術を総称していることばである。文芸において映画は重要な地位を占めていたため文革時期の映画界は「文革の重災区（甚大な被害を受けた分野）」²⁾と後に呼ばれるほどの被害を受けた。文革中、建国以来17年の映画は修正主義路線にあったとしてほとんどの作品が否定され、批判目的以外では一

般に見ることができなかつた。また各映画撮影所は批判闘争などによる混乱で劇映画の制作停止を余儀なくされた。それまでの作品もほとんどが否定されたことを加えると、文革期はまさに映画の空白時期にあったといえよう。

この時期、建国以来17年の文芸が否定されたことによって、それに替わる新たなプロレタリア文芸の必要性が叫ばれた。その代表として革命現代京劇と呼ばれる京劇の現代劇やバレエが「移植」と呼ばれる改作によって出現した。それらは文芸の模範とされ「革命模範劇」と呼ばれた。

1970年から江青によって革命模範劇の映像化が進められた。1972年までに現代京劇、バレエ劇など合計10本の作品が制作された。革命模範劇以外の一般の劇映画については1966年の文革開始から73年に至るまでの7年間1本も制作されなかつた。革命模範劇のなかでも「八つの模範劇」³⁾の映画が全国各地で盛んに上映されて「八億人民に八つの芝居」⁴⁾といわれる状況が続く。文革後に出版された『当代中国電影』は「まるまる7年間1本の劇映画も生まれなかつた。これは中国および外国の映画史上でもまれに見る現象である」⁵⁾と述べ、また呉迪は「文革期の映画」は「新中国映画史において特殊な時期の特定の呼称でもある」⁶⁾とその特殊性を強調している。1973年になってようやく『艷陽天』、『戦洪図』、『青松嶺』（『青松嶺』は1965年版のリメイク）が完成し一般の劇映画の制作が再開する。1973年から76年の文革終了までに制作された劇映画は、革命模範劇や伝統劇の映画も含めて全部で84本であった⁷⁾。

1975年に完成した『海霞』（北京電影製片廠、脚本：謝鉄驪、監督：銭江、陳懷皚、王好為）はそのうちの1本である。『海霞』は同時期に作られた『創業』とともにその公開をめぐる江青グループの妨害に遭い、上映までの道りは順調なものではなかつた。1976年10月6日に江青グループが逮捕されると、『海霞』は文芸界における四人組を批判し告発するキャンペーンに使われる⁸⁾。その中には「『四人組』による「圍剿（包圍討伐）」、「四人組との闘争」などのことばが用いられた。

『海霞』については中国映画史において現在でも「四人組」を批判し告発するキャンペーンの時の「圍剿（包圍討伐）」、「闘争」ということばを使用して説明したり、「『海霞』事件」ということばで表わされ「政治事件」として扱われている。たとえば舒曉鳴の『中国電影芸術史教程』では「『創業』、『海霞』をめぐる展開された闘争は、実際、激しく複雑な政治闘争であり、正義をふみにじる「四人組」に対する人民大衆、映画関係者の闘争であった」⁹⁾と「政治闘争」であると位置づけ、また『当代中国電影』では「七十年代中期、中国の映画界ではもうひとつ驚くべき事件が起こった。「四人組」が『海霞』を抹殺した政治事件である」¹⁰⁾と「政治事件」としている。

また映画史のみならず、当代文学史においても必ずと言っていいほど『海霞』は言及されている。たとえば『1967：狂乱的文学年代』では「1974～1975年、『園丁之歌』、『創業』、『海霞』をめぐる三度の激しい政治闘争が起こった」¹¹⁾とあり、『新中国文学五十年』では「『海

霞』のスタッフは圧力を受けながら終始闘争し、何度も迫害に抵抗し、勇敢に中央の指導者に訴えた¹²⁾と述べる。その他近年に至っても新聞、雑誌でしばしば記事として取り上げられている¹³⁾。それらの記述も映画史の記述と基本的に変わりがない。更に政治にウエイトを置いた研究でも言及されている。たとえば『“文化大革命”十年史』では「江青グループは映画『創業』、『海霞』などを利用して鄧小平への攻撃を行なった」、「(江青グループは)『海霞』を鄧小平攻撃の砲弾とした¹⁴⁾と『海霞』は鄧小平攻撃に使われたと記述されている。

謝鉄驪(1925-)は『海霞』の脚本を執筆した。この映画の監督として名前を連ねていないが、常に撮影スタッフと連絡を取り折に触れて撮影の指導をしていた。制作の過程で「『海霞』を非常に気かけ、後半は編集、録音、音楽、修正の仕事にすべて参加した¹⁵⁾という。また謝鉄驪自身も「『海霞』は私が脚本を書いたので、撮影の責任を負っているのに等しかった。だから『海霞』が批判されると私も責められ、責任をのがれることは出来なかった¹⁶⁾と語っている。また「『海霞』事件」について「始まりは芸術の上での争いだったのに、後に政治闘争の渦の中に巻き込まれた¹⁷⁾とふり返っている。

これまでは『海霞』の政治的な側面のみが強調され、「始まりは芸術の上の争い」ということについてはあまり言及されて来なかった¹⁸⁾。本稿は『海霞』の制作から審査、上映許可までの過程、上映許可後の動向について考察しようとするものである。具体的には、最初にどのような芸術上での争いがあったのか、それがいつごろ、どのような形で政治的な争いに変容したのか、映画を使って鄧小平を攻撃したとあるがどのように行なったのか等について、関連資料や関係者の回想、インタビューなどを用いて具体的な事実関係を明らかにしてゆく。それによって文革期の文芸政策がどのように行なわれていたのかの一端を解明しようとするものである。

2. 革命模範劇の映像化

1967年5月1日から6月17日にかけて毛沢東の「延安文芸座談会の講話」25周年を記念して、北京で「八つの革命模範劇」の合同公演が行なわれた。江青は革命模範劇の制作と普及に力を注いでいた。革命模範劇はその政治権力の確立と切り離せないものであったからである。そして全国への普及を図るため江青はその映像化を考える。そこには文芸の模範を映像で示すという意味もあった。江青は18の「革命模範劇」を推奨し、うち14作品が映像化された。この映像化について劉文兵は「そこでは、ただ見ることだけが求められたのではない。もちろん、見ると言う行為は政治学習の一環であり、当初から娯楽のためではなかったのだが、この時点ではそれを超えて、さらに人々には模範劇を学ぶことを求めたという点でも、世界の映画史において特異な存在であるといえよう¹⁹⁾と、娯楽目的ではなく政治学習のためであったと述べる。

謝鉄驪は1966年に文化大革命が始まると真っ先に批判の対象となった。主として1964年に「大毒草」として批判された映画『早春二月』（1963年・北京電影製片廠）が理由であった。謝鉄驪はこの映画の脚本を担当し監督もしている。文革が始まると「牛小屋」と呼ばれる私設監獄に入れられ、批判闘争に引っ張り出される毎日を1年以上送ったという²⁰⁾。

1968年の初秋、北京電影製片廠は革命模範劇『智取威虎山』の撮影を命じられる。謝鉄驪がその監督として起用された。起用の経緯は、まずカメラマンの李文化を江青が気に入り、李文化が謝鉄驪を江青に推薦したからだという。江青は『早春二月』を見たことがあり、謝鉄驪の芸術的センスを高く買っていたことがその背景にあった。謝鉄驪は解放前15歳で新四軍に入っており、文工団で演劇活動に従事していた。1950年2月、北京の文化部電影局に配属となり、以後映画関係の仕事に関わるようになっていた。上海へは一度も行ったことがなく、三十年代に「藍蘋」と称していた江青の女優時代を全く知らなかったことも謝鉄驪が起用された理由であると言えるだろう。「江青は上海にいたことのある人を最も恐れていて、自分のことを詳しく知っている人をとりわけ避けていた²¹⁾」という。謝鉄驪は革命模範劇撮影のため「牛小屋」から解放された。文革が始まってから北京電影製片廠で最も早く解放された監督であった。

謝鉄驪は以下の5つの革命模範劇に関わった。

◇現代京劇『智取威虎山』（1970年完成）

1968年初秋に『智取威虎山』の撮影グループが北京電影製片廠に作られた。監督は謝鉄驪、撮影は銭江。江青が登場人物の服装にまでうるさく口をはさむなどしたため撮影が難航した。1970年完成、10月1日全国公開。

◇バレエ劇『紅色娘子軍』（1971年完成）

1970年7月に撮影が開始された。初めは潘文展と傅杰が監督をしていたが、洪常青役の劉慶棠が不満を抱く。江青もラッシュフィルムに満足しなかったため、謝鉄驪と銭江が替わって撮るよう命じられる。1971年元旦全国公開。

◇現代京劇『龍江頌』（1972年完成）

1971年12月28日、銭江とともに撮影を命じられる。1972年7月から撮影。前の経験があったので撮影は順調に進み、3ヵ月あまりで撮影を終了。江青が北京にいない時に毛沢東が見て賞賛したため、審査は順調に通過した。

◇現代京劇『海港』（1973年完成）

初め李文化と傅超武が撮っていたが、江青が満足せず、1972年11月、謝鉄驪と銭江が替

わって撮るように命じられる。上海電影製片廠の謝晋も撮影に参加。1973年1月14日に江青がラッシュフィルムを見て不満をあらわにしたため撮り直しとなった。その後、撮影班は40日で『海港』を撮り終える。8月3日、江青が審査し14の意見が出すが、「以後注意」ということで審査を通過。

◇現代京劇『杜鵑山』（1974年完成）

1973年8月、江青は謝鉄驪と錢江に撮影を命じる。1974年5月23日公開。²²⁾

これら革命模範劇には「三突出」という原則があった。「三突出」とは文芸創作の原則で于会泳が「讓文芸舞台永遠成為宣傳毛沢東思想的陣地」（『文匯報』1968年5月23日）のなかで提起したとされる。「すべての人物のなかでは肯定的人物を突出させる、肯定的人物のなかでは主要な英雄的人物を突出させる、主要な英雄的人物のなかでは最も主要な、すなわち中心的人物を突出させる」という人物描写の原則である。そののち雑誌『紅旗』（1969年第11期）に上海京劇団『智取威虎山』劇組の文章「努力塑造無産階級英雄人物的光輝形象」が発表された。この際、姚文元は「三つの突出」を「すべての人物のなかでは肯定的人物を突出させる、肯定的人物のなかでは英雄的人物を突出させる、英雄的人物のなかでは主要な英雄的人物を突出させる」と改めた。以後、「三突出」の内容は後者をさし、「プロレタリア文芸創作の根本原則」とされた。

また「三突出」から発展して一連の文芸理論が生まれた。すなわち悪玉は善玉を引き立てる、善玉は英雄的人物を引き立てる、英雄的人物は主要な英雄的人物を引き立てるという「三陪襯（三つの引き立たせ）」や「三出新」（新時代、新人物、新生活を表現する）、「三打破」（京劇などの流派による節回しの違いの打破、役柄による節回しの違いの打破、古くからの演技の型の打破）、「主題先行」（まずテーマを決めてから人物、筋書などを考える創作方法）、「多側面（多面的）」、「多層次（多重的）」などである。これらは革命模範劇の映像化においても必ず守らなければならない原則とされ、映像化のための映画言語として次のようにまとめられた。

- ①善玉は近景で、悪玉は遠景で撮る。
- ②善玉には明るい光を当て、悪玉は暗くする。
- ③善玉を大きく、悪玉は小さく撮る。
- ④善玉は仰角で、悪玉は俯瞰で撮る。
- ⑤善玉は暖色で、悪玉は寒色を使う。²³⁾

また当時内部発行された小冊子『革命様板戲影片攝制總結匯編』には「シーンの数、場面において、すべての人物は主要人物を優先させなければならない」と書かれていたという²⁴⁾。

革命模範劇の撮影中、謝鉄驪は創作の楽しさを少しも感じなかったという²⁵⁾。当時「監督中心制」ということが批判されていて監督の権限はきわめて限られたものであったし、革命模範劇はせりふの一字一句も変えてはならず、創意工夫をはさむことは許されなかった。自由な創作活動とは無縁の世界だったのである。映画監督にとって自らの創作意欲を抑えなければならなかったことは耐えがたいものであったことは想像に難くない。「革命模範劇」で押さえつけられた創作意欲が謝鉄驪を『海霞』の制作へと向かわせたとも言えるだろう。

3. 『海霞』の制作から中央政治局による上映決定まで

(1) 脚本の作成から中断まで

1971年2月から「五・一六」の摘発運動が起こる。1971年3月8日、狄福才は、革命模範劇の映像化に関係する謝鉄驪らスタッフを北京二七機関車車両工場に下放させる。摘発運動の迫害から守るためであった。狄福才は、解放軍毛沢東思想宣伝隊の政治委員として北京電影製片廠に進駐しており指導的立場にあった。謝鉄驪らスタッフは工場で労働者階級から再教育を受けた。謝鉄驪らは労働者と親しく話すうち、労働者から「革命模範劇もすばらしいけれど劇映画も見たい。劇映画は撮れないのか」という意見を聞いた²⁶⁾。

1972年7月、國務院文化組は脚本の制作に力を入れ、劇映画の制作を再開することを決定する。狄福才も「監督でもカメラマンでもかまわない、脚本制作に力をいれよ。自分の創作でもいいし、他の作品からの脚色でもいい」と命じる。その年の8月の日曜日、謝鉄驪は工場から家に戻った。家では中学生の娘が黎汝清の小説『海島女民兵』を読んでいた。『海島女民兵』は実在の女民兵、汪月霞をモデルに創作された小説で、島の女性民兵が訓練を重ね祖国の防衛に務めるという内容である。謝鉄驪はこの小説の映画化を思い立ち、工場労働の合間に脚本を書き上げた。「もとの小説は映画的な要素が多く、党の具体的な政策に触れた部分が少ないので脚色しやすい²⁷⁾」と思ったという。またこの小説は1966年4月に第一版が、1972年2月には改訂を加えて人民文学出版社から出版されていた。小説『海島女民兵』は当時批判されたわけでもなく、映画化しても問題にならないと考えたのだろう。

『海霞』の脚本のあらすじは以下のとおりである。

解放前、中国の南海の同心島で女の赤ん坊が誕生した。家が貧しく子どもを育てられない父親は、桶に入れて生まれたばかりの子供を海に流そうとするが、同じ漁民の劉おじさんがその子を救う。子どもは海霞と名づけられ、なんとか育てられることになる。海霞が子どものころ、父親と劉おじさんは網元のボス、陳占鰲の悪事を暴き、反抗したために殺されてしまう。海霞の母親も飢えと寒さで亡くなる。両親を亡くした海霞は徳順じいさんに育てられる。

1949年の秋、大陸を追われた国民党軍が同心島に来て、続いて解放軍もやってくる。海霞の家にも解放軍がやってきて、ちょうどその時、海霞は台所で野草を煮ていた。解放軍の方指導員は兵士たちに野草を食べさせ、海霞には自分たちが持ってきた米を食べさせる。戦闘が始まり、海霞は戦火の中、解放軍にお湯を届けようとする。その時銃弾が飛んで来たが、方指導員がかばってくれたおかげで、海霞は負傷せずにすんだ。

戦闘が終り、方指導員は同心島の地区委員会書記となる。解放後、海霞は村の娘、玉秀、彩珠や阿洪のおかみさんとともに女子民兵を組織、労働の合間に軍事訓練に励む。かつての網元のボス、陳占鰲は台湾へ逃亡し、反撃の手始めとして海賊の黒風を同心島へ送り込む。黒風は劉阿太と名乗り、村人の親戚だと偽る。ある夜、女子民兵の訓練中に阿洪のおかみさんが崖の下へ落ちて大怪我を負う。連隊長の海霞は責任を取って連隊長の職を解かれそうになる。海霞が事故の原因を調べると、誰かが故意に仕組んだ事故であることがわかった。劉阿太と陳占鰲の差配であった尤二狗のしわざであった。劉阿太は無線で台湾の陳占鰲と連絡を取っていた。陳占鰲が同心島に上陸して巻き返しを図ろうとしている情報をつかんだ海霞たち民兵は、解放軍と協力して上陸を試みる陳占鰲たちに勝利する。²⁸⁾

脚本が完成すると、狄福才は『海霞』を北京電影製片廠の撮影計画に入れることを許可する。謝鉄驪はすぐに銭江、副監督の王好為などを加えて『海霞』撮影班を組織、1972年の8月から南海沿海で実際の生活を体験し、ロケ地を選定した。しかし北京に戻るや謝鉄驪は『海港』撮影の任務を受け、続けて『杜鵑山』を撮るように命じられる。そのため『海霞』の監督は凌子風(1917-1999)にまかされる。しかしロケ地は悪条件のうえ、あわただしく撮ったためフィルムの出来ばえが悪かったことにより、『海霞』の撮影停止の決定が下された。ロケ地から北京に戻った凌子風は「文芸黒線回潮に反対する」運動に巻き込まれる。この運動は、1972年から周恩来が日常の業務を取り仕切るようになると、江青グループはそれに対する反撃として「復辟回潮」に反対する運動を展開、文芸界においても「文芸黒線回潮に反対する」運動として展開されたものであった。1973年7月の湘劇『園丁之歌』の批判をきっかけに大規模な摘発、批判運動が展開され、撮影班は些細なことが取り上げられて批判される。凌子風は劇映画の監督の職からはずされ、外国映画翻訳の職場へ配置転換された。

(2) 撮影再開から審査まで

凌子風監督による『海霞』が挫折した後、謝鉄驪は1974年初めに『杜鵑山』を完成させ、次に『海霞』にとりかかろうとしていた。その矢先、文化組から北京電影製片廠核心指導小組の組長になるよう命じられる。謝鉄驪は行政の仕事に気乗りしなかったが断ることもできず、『海霞』の撮影担当の銭江に監督を依頼し、陳懷皚を第二監督、王好為を第三監督として新たな撮影班を組織する。

1974年7月、『海霞』の撮影の報告が出され、周恩来、張春橋、江青、姚文元が許可、中央軍事委員会の日常業務を行っていた葉劍英も批准する。于会泳は長年自分の助手を務めてきた王酩を『海霞』の音楽担当に推薦した。7月28日に撮影スタッフは北京を後に南下して撮影を開始した。映画は翌年の1月に完成する。

1975年1月25日、2時間の『海霞』のフィルムが審査のために文化部²⁹⁾に送られる。この時審査に当たったのは文化部の部長になったばかりの于会泳(1926-1977)と副部長の浩亮(1934-)と劉慶棠(1932-)であった。于会泳はもと上海音楽学院の教師であった。現代京劇の音楽を担当し、それに関する文章を発表して江青に気に入られたのがきっかけで、文化部部長にまで昇進していた。「三突出」の原則を最初に考えたのも于会泳である。劉慶棠はバレエダンサーでバレエ劇『紅色娘子軍』の洪常青役を演じている。浩亮は京劇役者で『紅灯記』の李玉和役を演じている。革命模範劇とつながりの深い三人が審査に当たったことになる。

2日間審査した後、于会泳が主として修正意見を出し、あとの二人はそれに付随、補足するような形で意見を出した。于会泳は謝鉄驪に、話した内容を印刷して撮影所に持ち帰り、撮影所の全職員を組織して学習、討論するよう命じた。

于会泳が出した意見はおおよそ以下のようにまとめられる。

一、映画の主題が明確でない。何に重点を置いているのか明確でない。「全民皆兵」に重点を置くのなら分量が少ないし、表現が突出していない。「常備不懈(常に警戒を怠らない)」とするならば、表現が突出していないし不明確。「労武結合(労働と軍事の結合)」とするならば更に不適切である。以上の三つがすべて含まれているようだが、突出しているものがなく主題がはっきりせず、重点がいったい何なのかわからない。映画は海霞の成長を描いているが、『紅色娘子軍』の呉清華や『紅灯記』の李鉄梅のように一定の主題に沿っておらず、この主題を表わすための処理がなされていない。

二、人物造形の問題。人物造形で主人公(テーマを表わす鍵となる中心人物)が確立されていない。それには以下のような原因がある。

①主人公をめぐる対立軸が作られていない。中心となる矛盾の最前線に主人公を置いていない。

②「三突出」(およびそれに関連する「三陪襯」)の原則に基づいてその他の人物と主人公の関係を処理していない。その他の人物は主人公の引き立て役になっていないばかりか、時には主人公の芝居を奪い、主人公を卑小化している。たとえば、海霞が阿洪のおかみさんや徳順じいさんの引き立て役になっている場面がある。また、海霞が前線にお湯を届ける場面では、方指導員が海霞をかばって負傷するところは、海霞が方指導員の引き立て役になっているだけでなく、海霞を卑小化する結果を招いている。悪玉も引き立て役の作用をしていない。総じて、映画は革命模範劇

の創作経験をもとに階級闘争、路線闘争の最前線上に多重的、多側面で立体化された主人公を作っていないし、「三突出」およびそれに関連した「三陪襯」の原則を守っていない。それに加えて筋書に多くの人為的な部分が見られる。それゆえ英雄的人物が確立されていない。

三、映画の構成がしっかりしていない

- ①解放前の芝居が長すぎる。対立軸が始まる前に下地は必要だが、長すぎではいけない。
- ②中心となる対立軸の展開が遅すぎる。全体の構成が「頭でっかちで、首が長く、体が短い」感じがする。

四、その他の問題

①いくつかのシーケンスが不適切

海霞の家に方指導員がやってきて許可を得ないで鍋の蓋を開け、煮ている野草を食べるのは「三大紀律八項注意（解放軍の紀律）」に違反している。方指導員らが鍋の野草をたいらげてしまった後に海霞が不満げな様子を見せると、方指導員らはどっと笑う。これは階級の感情に欠ける。まじめな場面なのからかうなど不適切だ。

②多くのシーンでテンポが緩慢。

③スタジオ内での撮影に真実味が感じられず、ロケ部分とつながらない。

④ロケ部分には霧がかかったようになった箇所がある。人物へのライトも真正面すぎる。

⑤方指導員の化粧が濃すぎる。ピンク色になっている時がある。

⑥海霞の演技が少し堅い。³⁰⁾

指摘はすべて表現上の問題であり、とりわけ「三突出」の原則が守られていないことに重点がおかれた。特に「野草を食べる」場面と「お湯を届ける」場面が問題にされている。

6月15日、前回の指摘を受け、100あまりの箇所を修正した第二版が再び文化部に送られる。「五ヶ所。特に「野草を食べる」場面と「お湯を届ける」場面が文化部の意見どおりに全く修正されていない」という理由で審査は通過しなかった。映画は更に修正を加えられ、6月22日、第三版が文化部へ送られるが、于会泳、浩亮、劉慶棠は審査を拒否した。

この二つの問題となった場面について、謝鉄驪が書いた電影文学劇本『海霞』（人民文学出版社、1977年6月）と実際の映像（VCD『海霞』北京北影録音録像公司）との違いを比較してみると、于会泳らの意見によってどのように修正されたかの痕跡を知ることができる。

この電影文学劇本からこの場面を要約してみると以下のようなになる。

空腹の海霞が苦い野草を煮ていると解放軍がやって来る。家で休ませてほしいというのだ。海霞がうなずくと、兵士たちは食事の準備を始める。しかし海霞が鍋を使っているのでご飯が炊けない。そこへ方指導員がやってきたので若い兵士が、鍋が空いていない、この人たちが食べているのは苦い野草ですと告げる。方指導員が若い兵士に二班の家の鍋は大きいから一緒に米を炊いてもらいなさいと指示する。指導員は鍋の蓋を開けて、「みんな腹が減ってたまらんだろう。とりあえずひとり一杯ずつ食べるのはどうだろう。」と言うと、兵士たちは争うように鍋の中の苦い野草をよそって食べた。自分の食べる野草を兵士に食べられた海霞は、くやしそうに彼らをにらみつけている。方指導員は「怒らないで。これからはこんなものを食べなくてもいいようになるから。苦いし渋いし、ほんとうにまずい。これはなんという野草かね。俺たちの山東の野草はここよりはずっとうまいよ。」と海霞をからかうように言った。「まずいと言いながら、食べているくせに。」海霞は腹を立てた。「しばらくしたら、あんたが俺たちの飯を食べたいいい。」と方指導員が微笑んだ。鍋が空っぽになっているのを見た海霞がきびすを返して部屋の中にもどっていくと、その様子を見た部屋中の兵士たちがどーっと笑った。そこへ炊き上がったばかりのご飯をかかえて兵士が入ってきた。方指導員が若い兵士に指図すると、兵士はすぐにご飯を茶碗に山盛りよそって海霞の目の前に差し出した。「あんたがたの苦しきは俺たちの苦しみだ。俺たちはあんたたちがこのような苦しい生活を二度と送らないようにここへやってきたんだ。俺たちはひとつの家族だ。お食べ。」方指導員が言った。海霞は熱々の茶碗を受け取ると体が熱くなり、涙が目から溢れ出した。

しかし映像では以下のように修正されている。

海霞が野草を鍋で煮ていると、若い解放軍の兵士がやって来て、「こちらで休ませてもらってもいいですか。」と聞く。海霞がうなずくと数人の若い兵士が入ってきた。兵士が鍋で野草を煮ているのを見る。鍋が空いていないのでご飯を炊くことができない。そこへ方指導員が入ってくると、兵士は「鍋が空いていません。」と言ってから、「苦い野草を煮ています。」と小声で方指導員に教える。方指導員は兵士に「二班の鍋は大きいから、米を持って行って一緒に炊いてもらいなさい。」と指示する。海霞に「鍋で何を煮ているの。見てもいいかな。」と聞くと海霞は「どうぞ。」と答える。そして「俺たちが食べてもかわらないかな。しばらくしたら、あんたが俺たちのを食べればいい。」と方指導員が言うと海霞が「別においしいものでもないよ。食べれば。」と答える。方指導員は兵士たちを集めて何か話している。兵士たちが入ってきて順番によそって野草を食べ始める。海霞が自分も野草を食べようと鍋をのぞくと、鍋は空になっていた。「めしが炊けたぞ。」と兵士の声をする。方指導員は「野草は食べなくていいよ。この野草は苦くて渋くて本当にまず

い。あんたがたの苦しみは俺たちの苦しみだ。俺たちはこれ以上あんたたちにこのような苦しい思いをさせないためにこっちに来たんだ。俺たちはひとつの家族だ。食べなさい。」と言いながら茶碗に盛った米の飯を海霞に渡す。

修正後は方指導員が海霞の許可を得てから鍋の中を見て、食べてもいいかどうかたずねている。解放軍の「三大紀律八項注意」に違反しないよう修正され、于会泳の言う「貧しい人をからかう」痕跡を消し去ってしまった。方指導員は人間味あふれる人物から、折り目正しいおもしろみのない人物に変わってしまっている。

もうひとつの「お湯を届ける」場面を電影文学劇本から要約すると以下のようになる。

方指導員は突然塹壕から飛び出し海霞に向かって「どうしてここに来たんだ。早く降りなさい。」と怒鳴った。「みなさんにお湯を届けにきたんです。」と海霞が言うや、突然耳をつんざくような音がした。方指導員は海霞に飛びかかり海霞を地面に押し倒した。砲弾が彼らの横で炸裂し、彼らは硝煙に覆われた。方指導員は海霞を引っ張り上げ海霞の体の土ぼこりをはらった。そして「二度と来てはいけない。」と厳しい声で言った。方指導員が塹壕に向かって歩き始めたとき、左腕から鮮血が流れ衣服を真っ赤に染めていた。

(戦闘が終り負傷した方指導員が担架で運ばれてくる)

海霞が追いかけて「方指導員。」と呼びかける。若い解放軍の兵士が少し足を止めて「傷が深いので病院へ運びます。」と言う。海霞は担架について何歩か歩き、何か間違いを犯したようにつらそうな様子を見せた。

(負傷した方指導員は入院する)

海霞が病室の入り口に現れ、方指導員を見るや飛ぶようにベッドの横に行き、彼の左腕をじっと見つめ涙を流し続けた。「方指導員、わたしのために……」³¹⁾

この場面の映像では、方指導員が「二度と来てはいけない。」と言った後、塹壕に向かって歩き始めるが、左腕から血が流れていない。戦闘が終って解放軍の兵士たちが山から村へ下りてきた。方指導員は負傷していて担架で運ばれている。海霞が「方指導員。」と声をかけると若い解放軍の兵士が「傷が深いので東沙病院へ運びます」と言い、海霞が心配そうにそれを見送っている。病室の場面では左腕を負傷した方指導員がベッドに座っている。海霞が病室に入ってきて「方指導員、わたしたちのために……」と言う。

この場面は方指導員が海霞をかばうものの、その時負傷したのではないように修正されている。それとつじつまを合わせるため海霞が病室に入ってきて「方指導員、わたしのために……」というせりふの部分の音声の「我」が「我們」に修正されている。海霞のために方指導員が負傷したのではなく、村人のために戦って負傷したことに変えたのである。「三突出」の

原則に従うならば海霞が「主要な英雄的人物」であるから、方指導員を救わなければならない。それはあまりにも不自然であるから譲れなかったのであろう。方指導員が海霞のために負傷したのでないことにしてなんとか審査を通そうとした苦心の跡が見受けられる。

なお映画の原作の小説でも「野草を食べる」場面の方指導員（原作では方小隊長）と海霞との会話の内容は電影文学劇本とほぼ同じで、「お湯を届ける」場面も方指導員が海霞をかばったために負傷することになっている。この部分は電影文学劇本が原作を踏襲していることがわかる。小説の段階では何ら「三突出」が問題になっていなかったところから見て、小説に対しては「三突出」はそれほど厳格ではなかったことがうかがえる。

この場面について謝鉄驪は、「このような状況で海霞が指導員を押し倒せとでもいうのか。こんな小さな女の子が指導員をかばうなんてどうやってできるというんだ。わたしは遠慮せず彼らと論争しました。でもだめでした。かれらは映画をわかかっていませんでした」と反論したという³²⁾。「三突出」の原則を劇映画に適用すると破綻が生じる一例であるといえよう。

(3) 審査後の動き

1975年2月上旬、周恩来が『海霞』を鑑賞した。周恩来が『海霞』を見たのは、中南海の映写係の好意からであった。映写係はもともと北京電影製片廠所属で『海霞』が撮影所内で評判になっているのを知っていた。病氣療養中の周恩来に見せたいという思いでフィルムを借りてきて放映したという。その後、鄧穎超から『海霞』の評判を聞いて朱徳の事務室がフィルムを取り寄せて鑑賞した。葉劍英、李先念などの中央の指導者もフィルムを取り寄せて鑑賞したという。それによって審査を経ていない『海霞』が中央の指導者の間で評判となるという現象が起こった。その後総参謀部でも放映されて好評を得た³³⁾。

3月初、于会泳と劉慶棠は中央の指導者が『海霞』を見たと江青に報告した。江青は「かれらは文芸を管轄していないのに、あれを見てどうするつもりだ」、「かれらは文化部に手を伸ばそうとしている」と激怒したという³⁴⁾。江青グループは周恩来事務室がフィルムを取り寄せたルートについて北京電影製片廠で調査するとともに、周恩来ら中央の指導者がフィルムを取り寄せて鑑賞した状況を調査した³⁵⁾。周恩来ら中央の指導者が審査に通っていない『海霞』を見たことは問題を複雑化させ、江青グループが『海霞』に対する態度を硬化させるきっかけとなったことは否めない。

文化部は年に一度の全国劇映画会議の準備のために、1月下旬に各撮影所に調査チームを派遣した。各撮影所の指導者の思想、創作に対する思想問題について調査研究するためであったが、于会泳は北京電影製片廠の調査の重点を『海霞』に置いて、文化部に有利な結論を得ようと図る。3月15日、北京電影製片廠の調査チームは「北京電影製片廠故事片創作、生産情況調査報告」を作成した。内容は下記のようなものであった。

江青同志は昨年、次のように指摘した。「北京電影製片廠の古くからの人間は創作において文芸の黒線の影響が深い。文革前、北京電影製片廠は周揚、夏衍のたぐいが重点を入れていたところである。文革後、彼らが進めた修正主義文芸路線は批判されたけれども、害毒は完全になくなっていない。それゆえ、劇映画を撮ったら古い影響がまた現れてきた。」

謝鉄驪同志は最近、「私の創作上の誤りの原因は「人道主義」である。」と述べたが、われわれはこの言葉が彼の以前の創作について言っているのではなく、現在の『海霞』も含まれていると思った。

謝鉄驪同志は昨年相当長い時間指導的な役割りを果たさず、大部分の精力を『海霞』に注いだ。『海霞』には人性論³⁶⁾という旧文芸思想の影響が見られ、「三突出」の創作原則から離れている。文化部の指導者が『海霞』に対して批判してからも少数の同志は「中央の意見を聞きたい」とか『『海霞』には政治的な問題はない」とか「もし上映したなら観客は必ず気に入る。青い空、大海、美しい娘たちが出てくるからだ」とまで言うものがある。これは北京電影製片廠の少数のものの創作思想がどの程度乱れているのか、修正主義文芸思想が彼らにどれほど深く影響しているかを物語っている。³⁷⁾

このように『海霞』を批判する内容である。江青のことは引用して報告書の権威付けを行ない、はっきりと『海霞』と謝鉄驪の名前を挙げて批判している。翟建農この時の報告書が『海霞』の芸術上の深刻な問題から「文芸黒線回潮」にまで引き上げられて論じられ、新聞雑誌に掲載してもおかしくない檄文となっていると指摘している³⁸⁾。この報告書には『海霞』が表現上の争いを政治的なものに押し上げようとしている意図が感じられる。

6月15日の二度目の審査の決定に不満を抱いた謝鉄驪は、王好為の夫であるカメラマンの李晨声に江青宛に手紙を書くように言い、謝鉄驪と銭江の署名を加えて6月16日に送る。「すべて文化部の意見に基づいて修正した。これ以上の修正は非常に困難だ。時間と労力がかかるだけでなく、人物関係を変えらるとなると映画の骨格がくずれてしまうし、支離滅裂になってしまう。それゆえ文化部の意見には組織として従うが、心中は納得がいかない」と映画を見て公正な判断をし、指示を出してくれるよう求めた³⁹⁾。しかしこの頃江青は大変な時期であった。というのは、5月3日に毛沢東が江青と「四人組」を批判し、続いて開かれた中央政治局会議では「四人組」について批判が行なわれ、江青は自己批判書を書くことを迫られていたからである。

6月18日、江青はこの手紙を張春橋に渡して「北京電影製片廠のことはよくわからない」、「撮影して100あまりのシーンを改めたのなら上映するようすすめる。間違った映画は批判し、いい映画は推薦したらよい」と指示する。張春橋はそれに「江青同志の意見に同意します。これは積極的な方法です」⁴⁰⁾と書いて謝鉄驪からの手紙と江青からの手紙を文化部へ回した。

三度目の文化部の審査の翌日である6月23日、劉慶棠が北京電影製片廠に来て全廠職工大

会を開催し、先日の江青と張春橋の指示を伝えた。その大会で「文化部核心小組が北京電影製片廠核心小組および撮影所全同志に宛てた公開状」を読み上げた。文化部副部長の劉慶棠は映画に関する行政も担当していた。「公開状」の内容は次のようなものであった。

一、『海霞』については中央の指導者が既に重要な指示を出している。われわれはこれを熱烈に擁護し、断固として貫徹、実行しなければならない。この指示を謝、銭同志の手紙の原文と一緒に撮影所の全同志に伝達する。

二、『海霞』についてわれわれは幾度か審査し多くの意見を出し、撮影スタッフはその意見に基づいて修正した。しかし、今に至ってももともと存在する問題が基本的に克服されていない。苦い野草を食べる場面と指導員が負傷する場面だけでなく、他の重要な場面も解決されていない。それには二つの原因がある。

①主要なスタッフは実生活の体験が不十分で、闘争経験に乏しい。特に脚本と監督を担当したものは生活に深く入っておらず、部屋の中で脚本を書いている。その上、工農兵の主要な英雄的人物をつくるという主要任務の観念が確立されていない。

②主要なスタッフはわれわれが一致して出した意見に対して異なった考えを持っている。なぜなら、彼らに自分たちの考えを持つことを許したために、彼らは似て非なる修正を行なった。それは双方にとって満足のいくものでなかった。

以上のことから、中央の担当の同志の指示に基づいて、われわれはこの映画を修正せず完全にもとのまま（即ち第一回の審査の前）上映し、新たに修正したシーンは一切採用しない。上映を通じて大衆に批評してもらい、それから修正するかどうかを考える。又同時にわれわれに評論する権利と推薦する権利を残しておく。⁴¹⁾

文化部の下した「上映を通じて大衆に批評してもらおう」という決定は文革期によく用いられた手段であった。実質は大衆に批判させ、自分たちに有利な言論を得るという手法であった。江青の指示では上映するのは修正後の版本となっていたのに、この公開状では「修正せず完全にもとのまま」と変化している。修正後のフィルムなら于会泳たちが指摘して直した部分も入っており、その部分を指摘されたら文化部の立場が不利になると考えたと推測される。修正前のフィルムの公開に不満を持った謝鉄驪は6月25日、再び李晨声に手紙を書かせ、謝鉄驪と銭江の署名を加えて張春橋に送った。張春橋はその手紙に「われわれは百以上のシーンを修正したフィルムの上映を肯定したことはない」、「文化部が修正を加えていない版本の上映がよいというのなら、文化部の意見にしたがってもよい」という指示を加えた⁴²⁾。その後手紙は江青に回され、江青もそれに同意して文化部に送られた。

修正を加えないフィルムはネガから作り直しをしなければならなかった。この頃、「修正したのにどうしてまたもとに戻さねばならないのか」と現場では不満の声があがったという。仕

方なく、文化部が自分で組織して監督台本を基に第一版のフィルムを作り直した。謝鉄驪はすぐにこれは自分の作品ではないと宣言したという⁴³⁾。

6月26日深夜、文化部の指示によって北京電影製片廠政治部の責任者は、撮影所の編集室を封鎖し、『海霞』のすべてのネガとラッシュフィルムを持ち出し禁止措置にした⁴⁴⁾。

7月4日、北京電影製片廠は再び全廠職工大会を開催し、劉慶棠が二通目の手紙に対する江青、張春橋の指示を伝え、二通目の公開状を読みあげた。

『海霞』の問題の関して7月2日春橋、江青同志が重要な指示を出した。われわれはこの指示を真剣に学習し討論し、熱烈に擁護し、断固として徹底的に実行する。

経験教訓の総括を通じて北京電影製片廠のギルド的な監督中心性と専門家が撮影所を支配する路線を打破し、創作の思想における様々なよくない傾向と謬論を批判し克服する。

経験の総括は団結の願いから出発しなければならない。批判または闘争を経て、矛盾を解決し、新たな基礎の上に新たな団結を築き、北京電影製片廠を毛主席革命文芸路線を実行するプロレタリアの映画の陣地にする。⁴⁵⁾

一通目の公開状のほうは批判が具体的であったが、二通目は内容が抽象的であるものの批判がより鋭くなっている。この段階で『海霞』は芸術的な意見の食い違いから政治的な批判へと完全に押し上げられたと見て取れる。ただし撮影所内だけの批判にとどまっている。

これと同じ頃、文芸界における文化大革命の行き過ぎた傾向を是正しようという動きが生まれていた。1975年1月から鄧小平が党と政府の日常実務を主宰するようになっていたが、7月からは全面整頓に力を入れ、文革の行き過ぎの軌道修正が功を奏していた。文芸政策に対しても見直しが図られていた。7月初め鄧小平が毛沢東に文芸の状況を報告した時に、毛沢東は「模範劇はたいへん少ないし、そのうえ少しばかりの誤りがあるだけですぐに批判されている。百花齊放は全く姿を消してしまった。他の者が意見を出せないというのはよくない」と指摘した。7月14日、毛沢東は「文芸には調整が必要だ」という発言もしている。

1974年12月に完成した映画『創業』（長春電影製片廠、監督：于彦夫、脚本：張天民）は1975年2月11日に全国で公開されたにもかかわらず、その直後映画を見た江青が激怒したことによって⁴⁶⁾ 十の罪をかぶせられた。脚本を担当した張天民は7月18日に毛沢東に手紙を書いて⁴⁷⁾、映画制作の経過を簡潔に述べ、上映が開始されたにもかかわらず、すぐに「映画のコピーは中止する、新聞紙上に評論を掲載しない、国外に出さない、テレビ、ラジオの放送を中止する」などの決定が下された状況を説明し、「十の罪」に納得できないと述べた。7月25日、毛沢東は「この映画に大きな誤りはない。審査を通過させて上映するよう提案する。全面的に非難しない。十以上の罪名をあげるのは行き過ぎだ。党の文芸政策の調整にとってよくな

い」⁴⁸⁾と張天民の手紙に指示を書いた。これら一連のできごとによって、文芸界における文化大革命の行き過ぎた傾向を是正しようという動きが生まれていたのである。

この頃、賀捷生（賀龍の娘、1935-）は謝鉄驪と連絡を取り「周総理は『海霞』について関心を示し、『海霞』はどうなっているのかと尋ねている。手紙を書いて総理に報告したらいい」と助言した。7月12日、謝鉄驪は今回も銭江と連名にして国務院の信訪部門に手紙を渡した。手紙はそこから周恩来事務室に渡ったものの、当時周恩来は病気であったため、この手紙を見なかったという。しかし、この手紙はしばらくして国務院信訪部門編集の「人民来信抜粋」に掲載され、政治局で閲覧された。

それとほぼ同時期、国務院政策研究室の責任者であった鄧力群は、王好為の母親と知り合いだったことから、王好為、李晨声夫妻が『海霞』の件で批判され苦境に立たされていることを知った。王好為夫妻から『海霞』についての事情を聞くと、『海霞』の件を毛沢東に手紙を書いて訴えたらどうかと勧めた。また手紙は自分が責任を持って毛沢東に渡るようにするとも述べた。夫妻はこの件を北京電影製片廠に進駐していた軍代表で友人でもある恵安安に相談する。三人は、自分たちの名義で手紙を書くより、謝鉄驪と銭江名義にしたほうが手紙により効力を持たせることができると考えた。謝鉄驪と銭江も同意したので、王好為、李晨声、恵安安の三名が手紙を書き、鄧力群にも見てもらった。7月25日、手紙は鄧力群に託され、鄧小平から毛沢東の手に渡った。手紙の内容は以下のようなものであった

『海霞』は旧正月前に撮影が完了し、文化部の審査に送られたが審査に通らなかった。于会泳同志は数十の意見を出し、全面的に否定をして、革命模範劇の「三突出」、「三陪襯」の創作の原則に反しており、重大な路線上の問題であると批判した。于会泳ら同志の審査意見と数回の批判はどこまでも理論、原則を振りかざしたもので、芸術上の問題を政治問題にまで発展させ、「英雄的人物を卑小化し」、「人民解放軍を醜く描き」、「貧しい人をからかい」、「文芸黒線回潮の典型」などのレッテルを『海霞』に貼った。于会泳ら同志は『海霞』の芸術様式が気に入らない。舞台劇の作劇法に慣れ親しんでいるから、『海霞』を「頭でっかちで、首が長く、体が短い」怪物であると揶揄し、『海霞』の散文的な形式を「模範劇を学んでいない、何が新しい方法だ、何が散文式だ、完全に地主ブルジョア階級の人性論だ」と言った。⁴⁹⁾

そしてそれまでの経緯を詳しく述べて、「われわれは于会泳、劉慶棠ら同志のやり方は毛主席の革命路線から外れ、百花齊放の方針に違反していると考える」⁵⁰⁾とし、毛沢東に指示を求めた。

この手紙は『海霞』の状況を好転させるきっかけとなった。毛沢東は7月29日、手紙に「印刷して政治局の全員に配布せよ」と指示を書いた。そして鄧小平の主導で、7月30日の

夜、中国共産党中央政治局で『海霞』の第一版と第三版の審査を行なうことが決定された。

審査が行なわれることはすぐに中国共産党中央弁公庁秘書局に伝えられ、審査の準備が開始された。当時、中国共産党中央弁公庁秘書局にいた周啓才は以下のように回想している。審査用のフィルムの準備のため、中国共産党中央弁公庁秘書局が文化部に電話するが、文化部からは「フィルムはぼろぼろになっており、見られない」という返事が返ってきた。その報告を受けた汪東興は、文化部からの返事に疑問を抱いた。そして秘書局の陳恩恵に、警衛局服務処映画放映組の責任者であった于器海を連れて文化部へ調査に行くよう命じる。陳恩恵と于器海が文化部の于会泳に尋ねると、全く同じ答えが返ってきた。ぼろぼろになったフィルムはどこにあるのかと于会泳にたずねると、北京電影製片廠にあると言う。二人が北京電影製片廠に行こうとすると于会泳が「われわれのところから人を出して案内させよう」と申し出た。しかし、文化部が小細工をして隠蔽をはかるのを恐れた二人は、その申し出を断った。北京電影製片廠に着いて事情を説明すると、「文化部の言うのは間違いだ。『海霞』は修正したがぼろぼろになっていない。放映して見ることが可能だ。整ったフィルムを保管しているし、『海霞』のネガもここにある」と北京電影製片廠の人間が答えたという⁵¹⁾。

7月30日、人民大会堂の小ホールで『海霞』の審査が行なわれた。鄧小平、張春橋、李先念、華国鋒、呉徳ら8名の政治局委員と于会泳、張維民、謝鉄驪、錢江も出席した。江青は出席しなかった。4時間にもおよぶ2つのバージョンの放映が終わると映画についての討論に入った。呉徳は「この映画は政治上何ら問題はない。芸術上は少し修正が必要だ。現在すでにいくつかのシーンを撮り直している。もともと撮っていた部分と修正や撮りなおしたシーンを後からつないで編集して上映したらどうだろう」と意見を出した⁵²⁾。7月31日、中央政治局会議は作者が修正を加えたバージョンを上映するという決定を下した。

(4) 上映決定から文革終結後の再上映決定まで

1975年8月13日、毛沢東は北京大学中国文学科教員の蘆荻との談話の中で、『水滸伝』は宋江の投降を描いており反面教材とするのにふさわしいと話した。翌日、蘆荻は毛沢東の『水滸伝』に関する談話を文章にまとめ、姚文元に届けた。姚文元はその日のうちに毛沢東に手紙を書いて、毛沢東の意見に賛成だと伝え、また建国以後に書かれた『水滸伝』の評論について自分の意見を述べた。そして最後に新聞や雑誌を使って『水滸伝』批判を展開したらどうかと提案した。すぐに毛沢東は同意するという指示を出した。8月下旬頃より江青グループは『水滸伝』批判を展開、全面整頓に対する大反撃を開始する。『水滸伝』批判は投降派批判の形をとりながら周恩来や鄧小平を暗に攻撃したものであった。7月31日の中央政治局会議で『海霞』の上映が決定されて『海霞』をめぐる状況は好転したかに見られたが、その後の『水滸伝』批判運動によって江青グループが再び勢力を盛り返したことにより、好転には至らなかった。

9月15日、全国農業学大寨大会が開催された。江青はその数日前に大寨到着して『水滸伝』批判の発言をした。また9月14日には『海霞』について、「『海霞』は違うものになってしまった。基調が悪いし、百以上のを修正した。これ以上修正してもよくなる。基調もよくなる。私はこの映画を批判できる。基本的な面がよくない。謝鉄驪も銭江も以前随分助けてやったのに……彼らにはブルジョアジーがいう良心さえも持っていない」、「彼らは政治局に手紙を書き、毛主席に手紙を書いた。主席は指示を書かなかった。政治局の何人かの同志は事情を理解しておらず、フィルムを見て態度を表明してしまった。彼らは文化部に圧力を加え、今文化部は押さえつけられている。私は彼らに代わって抵抗している。私は怖れるものがないから抵抗している。私が決定を覆そうとしていると言うものもいるが、決定を覆すのではなく、反撃なのだ」、「『海霞』は批判しなければならない。しかし今はやらない。『水滸伝』批判の邪魔になるからだ。将来批判しなければならない」⁵³⁾と述べた。また9月18日江青は北京電影製片廠、長春電影製片廠の人員を集め、鄧小平を名指しで批判している。『海霞』について「『海霞』はよくない映画だ。主要な英雄的人物が都会の娘のように描かれている。今は批判しないが、将来批判しなければならない」、「謝鉄驪と銭江は修正主義勢力の代表だ」、「『海霞』の借りは将来必ず返す」⁵⁴⁾と批判した。この2回の江青の発言から、『海霞』批判より『水滸伝』批判を優先していたことがうかがえる。

『海霞』は中央政治局会議によって上映が決定されたものの、実際の上映には厳しく制限が加えられていた。于会泳や劉慶棠らは「農村に出さない、海外に出さない、祝祭日に上映しない、宣伝しない、よいフィルムを使って現像しない」などの制限を加えたという⁵⁵⁾。それゆえ『海霞』についての評論も主要な新聞、雑誌に掲載されないよう抑えられていた。ところが1975年10月15日、『解放軍報』に「在階級闘争中成长——喜看彩色故事片『海霞』」が掲載される。内容は未確認であるが、題名から『海霞』について賞賛している文章であることがうかがえる。この経緯について当時解放軍報社で編集員をしていた園丁は、中央政治局会議が『海霞』の上映を決定したことについて、「江青グループが情報を封鎖していたものの、こうした情報はうわさで伝わってきた。間違いがないかを確認した上で、紙面の半分を使って『海霞』についての評論2篇を10月15日『解放軍報』に掲載した」⁵⁶⁾と証言している。『海霞』について新聞雑誌にそれほど強い統制を行なっていなかったことがうかがえる。

1975年11月頃から鄧小平に矛先を向けた「右からの巻き返しの風」に反対する運動が活発化する。1976年3月1日、江青グループは『紅旗』第3期に初瀾の「堅持文芸革命、反擊右傾翻案風」を発表する。初瀾とは國務院文化組の執筆グループ名で江青が指揮していた。この初稿の段階では『海霞』を名指しで批判する予定であった。姚文元が文化部に指示して別に『海霞』だけを批判した文を書くように命じたため、この中では『海霞』とはっきり名前を出さず、ほのめかす戦法を取った。文中に「すべての革命模範劇と張り合う作品、もしくは工農兵の形象をゆがめる作品を彼は一目で気に入り自ら乗り出して大いに後押ししている」とあ

り、「革命模範劇と張り合う作品」とは『海霞』を指したものとされている⁵⁷⁾。「彼」とは鄧小平のことである。

3月2日、江青は十二省、自治区会議を招集して演説をした。まず鄧小平の名前を挙げて批判してから『海霞』について、「彼らのはあの『海霞』を重視している」、「政治局の全員に『海霞』を見るように命じた。『海霞』そのものだけでなく『海霞』のものの版もすべて見るように命じ、フィルムは全部で24本あった。見るのにどれだけの時間がかかることか。1時間で6本見るとすると4時間かかる。そんなに長く見る目的は何か、『海霞』を守るためだ」と鄧小平と『海霞』を結びつけて批判しようとしている⁵⁸⁾。

3月23日、江青グループの下にある執筆グループは「右傾翻案風と電影『海霞』」という文を書いた。その校正刷りを江青と姚文元が審査した。姚文元は文章に不満を示し、「この文は満足のいくものではなく、修正が必要だ」、「脚本家、監督に向けるのではなく、右からの巻き返し風の扇動者と製造者に予先を向けろ」との指示を書いた。しかし江青が読んだ後、特に可否を明らかにしなかったためにそのまま留置かれたという⁵⁹⁾。

文章が発表されなかった主な原因を狄翟は「『海霞』が犯した誤りは脚本家と監督が自分の意見にこだわったためであるとし、「右傾翻案風の扇動者」が『海霞』を支持した事実にも乏しかったこと」であるとしている⁶⁰⁾。この「右傾翻案風の扇動者」とは鄧小平のことをさす。鄧小平が『海霞』を支持した事実にも乏しかったことが『海霞』と鄧小平を積極的に結びつけて批判するのに二の足を踏んだ原因であると思われる。

結局『海霞』が公の刊行物で名指して批判されたのは、1976年『人民電影』第4期（8月27日）に掲載された「必須堅持社会主義文芸的根本任務」の1篇だけであった⁶¹⁾。この文章では『海霞』を列伝式映画で散文式の芝居であるとし、「三突出」の枠組みからはずれていると批判している。表題に「鄧小平反革命修正主義路線を深く批判しよう」とは書いてあるものの、映画の表現形式の批判に終始し、鄧小平と『海霞』を直接結びつける表現は本文には見あたらない。

9月9日に毛沢東が逝去する。文化部はこれを機会に『海霞』に対する反撃を本格的に開始する。于会泳は10月12日に文化部系統による「批鄧、反撃右傾翻案風」大会を開催し、そこで『海霞』を公開批判し、謝鉄驪、銭江らを批判する予定であった。しかし10月6日「四人組」が逮捕され、続いて10月中旬には于会泳、浩亮、劉慶棠の隔離審査が行なわれる。10月21日、文化部電影局は江青グループによって抑えられていた映画の再審査を始める。審査の結果、『海霞』は11月2日に上映が再開される。また雑誌『人民電影』の1976年第7期（11月27日出版）には『海霞』の電影文学劇本と映画を紹介する写真が掲載され、1976年第8期（12月27日出版）では『海霞』の写真が表紙を飾った。これは実質上の『海霞』の名誉回復であった。

4. 結語

『海霞』は1975年1月25日の1回目の審査時から「三突出」の原則を守っていない点が指摘された。それは表現上の問題であった。審査したのは于会泳、浩亮、劉慶棠の「革命模範劇の申し子」といもいえる三人だった。以前文化組の文芸創作指導小組でこの三人と一緒にいた謝鉄驪は映画の専門家としての自負もあり譲れない点多かったであろう推測する。頑強に抵抗する謝鉄驪に対して、于会泳らは不満をつのらせる。その間、周恩来をはじめとする中央政治局の数人が審査で許可されていない『海霞』を見て肯定したことにより、文芸界をその権力基盤としていた江青グループは危機感を覚える。その1ヶ月ほど前の1月13日から18日まで開かれた第四期全国人民代表大会第一回会議で周恩来は総理に、鄧小平は副総理に選出され、江青の「組閣」の計画は失敗に終わっていた。会議終了後、周恩来の病状が悪化したため、鄧小平が党と政府の日常業務をつかさどることになった。江青グループが周恩来や鄧小平への反撃の機会をうかがっている矢先のことだった。周恩来や鄧小平は江青グループの意図に反して、文革の行き過ぎた面を是正しようとしていたからである。

文化部は3月15日に北京電影製片廠に調査チームが入ったのを機会に「北京電影製片廠故事片創作、生産情況調査報告」を作成し、謝鉄驪および映画の制作スタッフを批判する。この段階から『海霞』を政治的な批判に押し上げようとする意図が表れ始める。そしてそれは7月4日の全廠職工大会では決定的なものになる。しかし映画の表現上の問題から出発しているので、批判されたのは謝鉄驪および映画のスタッフで、その批判も北京電影製片廠内に留まっていた。

7月頃から文芸界にも文革の行き過ぎた傾向を是正しようという動きが起こった。ちょうどこの時期に、謝鉄驪らは毛沢東に宛てて『海霞』についての現状を訴える。鄧小平が中央政治局による『海霞』の審査を提議、7月31日、中央政治局会議は作者によって修正されたフィルムの上映を決定する。この毛沢東宛の手紙が大きく影響したことは否定できない。しかし上映が決定されたものの、周恩来、鄧小平を暗に攻撃した『水滸伝』批判で江青グループは勢力を盛り返し、『海霞』について演説の中で批判をする。11月から鄧小平批判として「右からの巻き返しに反撃する」運動が始まると何とか鄧小平と結びつけて批判しようとしたが、鄧小平との直接的な関係を示す決定的な事実には乏しかった。それゆえ、『海霞』が『人民日報』などの党の全国的な機関紙で名指して批判されることはなく、1976年『人民電影』の第4期に批判文が掲載されたのみであった。それでも文化部は何か文化部系統による「批鄧、反撃右傾翻案風」大会を開催しようとする。1976年10月12日に予定されていた大会では『海霞』を公開批判し、謝鉄驪、銭江らを逮捕する手はずとなっていた。しかし、10月6日の「四人組」逮捕によってその計画は実現不可能となった。『海霞』は文革期の政治動向と歩みを同じくしたと言っても過言ではない。

『海霞』の作品自体に目を向けてみると、公開後『海霞』は観客に好評だったという。その原因はいくつか考えられる。女性民兵の生活が生き生きと描かれていること、中でも阿洪のおかみさん役の王蘇婭の演技が出色で、阿洪夫婦の情愛が描かれている。夫婦間のもめごととそれを解決する過程は説教的であることは否めないものの、文革期の映画で夫婦間の情愛を描いているのは他にあまり例を見ない。また海賊、黒風が劉阿太と名前を変えてスパイ活動を行ない、女性民兵がそれと戦うといった娯楽活劇的な要素も盛り込まれている。このように人々を惹きつけた要素は、とりもなおさず革命模範劇には見られなかった特徴である。

文革後期に制作された劇映画の映像表現について『新中国電影史話』は「ジャンルの上で革命模範劇の垣根を越えたものの、それらは例外なく「三突出」の原則に終始し、様々な規定、制限を守ることが迫られ、そこから抜け出すことはできなかった。映画制作者については「三突出」を完全に実行しているかどうかは毛主席の文芸革命路線の基準を実行しているかどうかを検証する決め手となった」⁶²⁾と述べる。また王土根は文革期の劇映画は「基本的な語りのモードは革命模範劇のいくつかの特徴を踏襲している。たとえば「三突出」の原則などである」⁶³⁾と劇映画も革命模範劇の「語りのモード」を踏襲していたと述べている。しかし『海霞』について言えば「三突出」の原則に終始していたとは言い難い⁶⁴⁾。『海霞』の「三突出」の原則をはずれたところが観客を惹きつけたとも言えるだろう。文芸は江青グループがにぎる権力基盤であった。それゆえ「三突出」の原則からはずれた作品は彼らに危機感を持たせ、自らの権力基盤を揺るがしかねない恐れを抱かせたのかもしれない。

限取で善玉と悪玉とが一目瞭然であり、善と悪が二極化した伝統的を持つ京劇では「三突出」の原則は容易に適用できる。しかし劇映画に適用すると映像は型にはまったようなものとなり、人物も教条的で生き生きと血の通った人間が描かれなくなる。リアルさを求めれば求めるほど「三突出」と映画言語との間に矛盾を生じてくるのである。謝鉄驪は文革中5本の模範劇の映像化に関わった。それらの経験があったからこそ劇映画制作における「三突出」の原則の適用に違和感を感じつつ、限られた中で精一杯自分の描きたいものを描こうと努力した。

『海霞』は文革が終わるや全面的に肯定され「名誉回復」される。文革中に「四人組」によって弾圧されたが、映画人がそれに抵抗したという理由で賞賛された。文革中、江青グループによって賞賛され、文革が終わるや「陰謀映画」と称されて激しく批判された『春苗』⁶⁵⁾とはまさに逆の運命をたどったのである。

注

- 1) 中国共産党中央委員会《通知（1966年5月16日）》。公表は《人民日報》1967年5月17日。
- 2) 胡星亮、張瑞麟主編《中国電影史》中央廣播電視大学出版社、1995年9月、P.285。
- 3) 現代京劇『紅灯記』、『沙家浜』、『智取威虎山』、『奇襲白虎団』、『海港』、バレエ劇『紅色娘子軍』、『白毛女』および交響音楽『沙家浜』の八つの演目。毛沢東の『延安文芸座談会の講話』25周年を記念して「八つの模範劇」が北京で合同公演を行なった際、この名称が用いられた。《八個革命样板戲

- 在京同時上演》、《人民日報》1967年5月25日)。
- 4) 韓焯, 陳曉雲《新中国電影史話》浙江大学出版社, 2003年3月, P.146。
 - 5) 《当代中国》叢書編輯部編《当代中国電影(上)》中国社会科学出版社, 1989年1月, P.323。
 - 6) 吳迪《“文革”十年:中国電影的一場災難》,《中国電影年鑑》編輯部《中国電影百年特刊》中国電影年鑑社, 2005年7月, P.197。
 - 7) 注5の《当代中国電影(上)》P.331ではこの間76本の劇映画が制作されたと単に数字だけが示されているが, 翟建農《紅色往事》(台海出版社, 2001年4月 PP.477-479)では具体的な作品名を列挙している。
 - 8) たとえば北京電影製片廠《実行資産階級文化専制主義的鉄証》,《人民日報》1977年2月27日や文化部批判組《“四人幫”圍剿〈海霞〉是一场嚴重的階級闘争》,《人民日報》1977年12月3日など。
 - 9) 舒曉鳴《中国電影藝術史教程》中国電影出版社, 1996年6月, P.154。
 - 10) 注5, P.339。
 - 11) 楊鼎川《1967:狂乱的文学年代》山東教育出版社, 1998年5月, P.76。
 - 12) 張炯主編《新中国文学五十年》山東教育出版社, 1999年12月, P.481。
 - 13) たとえば,《電影作為政治祭品的時代》,《新京報》2005年1月21日や《電影〈海霞〉誕生記》,《党史縱横》2006年第12期など。
 - 14) 高皋, 嚴家祺《“文化大革命”十年史》天津人民出版社, 1986年9月, PP.560-561。
 - 15) 汪洋, 汪林立《我看北影三十五年(二)》,《電影創作》2000年第2期。
 - 16) 付曉紅《兩步跨正平——謝鉄驪口述実録》中国電影出版社, 2005年11月, P.142。
 - 17) 狄翟《生活是藝術的源泉》,《電影藝術》1994年第1期。
 - 18) 『海霞』については注5の《当代中国電影(上)》でも比較的詳しく論及されているが, 狄翟《〈海霞〉事件本末》(《電影藝術》1994年第3期および第4期)が管見の限りでは最も詳しい記述といえる。また注7の翟建農《紅色往事》の中の『海霞』冤獄実録の記述も詳しいが,《海霞》事件本末と重複する部分が随所に見られ, 同じ資料を使っている可能性が高い。ただしこれらの中には不十分な点や他の資料との食い違いも見られる。
 - 19) 劉文兵『映画のなかの上海』慶應義塾大学出版会, 2004年12月10日, P.141。
 - 20) 注17。
 - 21) 注16, P.115。
 - 22) 注7の翟建農《紅色往事》および国家廣播電影電視総局電影事業管理局党史資料徵集工作領導小組編《中国電影編年紀事(製片卷)》中央文献出版社, 2006年12月を参考にした。
 - 23) 注4, P.139。
 - 24) 注4, P.140。
 - 25) 《謝鉄驪在“文革”中》,《中国芸術報》第403期(2004年4月16日)。
 - 26) 注16, P.127。
 - 27) 注16, P.136。
 - 28) 電影文学劇本である謝鉄驪《海霞》人民文学出版社, 1977年6月。
 - 29) 文革で文化部は批判され活動を停止していた。1971年7月にそれにかわる組織として文化組が創設され, 1973年, 江青の提議により, 文化組の下に文芸創作指導小組が創設され, メンバーは于会泳, 浩亮, 劉慶棠, 謝鉄驪, 李徳倫の5人であった。謝鉄驪はこの中で映画の専門家として映画創作の指導を受け持った。文化組は1975年1月17日に文化部に改組された。
 - 30) 注7の翟建農《紅色往事》, PP.333-336。
 - 31) 注28, PP.16-20。
 - 32) 注16, P.142。
 - 33) 注7の翟建農《紅色往事》, PP.338-340。注16の《兩步跨正平——謝鉄驪口述実録》PP.142-143によると, 1月25日の審査で于会泳から出された意見に納得できなかった謝鉄驪は, 國務院信訪部門宛てに手紙を出して周恩来に訴えたという。賀捷生(賀龍の娘, 1935-)を通して『海霞』のことを周恩来総理に話してもらったので, 総理はこの映画を見てみたいと言った。そこで北京電影製片廠から釣魚台の映写室に派遣されている放映係を通じて周恩来に映画を見せたという。この時期に謝

鉄驪が國務院信訪部門に手紙を書いたという事実は注7の《紅色往事》と注18の《海霞》事件本末には書かれていない。周恩来が『海霞』を見たのは、中南海の映写係の全くの好意からであったとしている。謝鉄驪は同じ年の7月12日に賀捷生の勧めで國務院信訪部門宛てに手紙を出して周恩来に訴えている。この時のことと混同したのかもしれない。

- 34) 注7の翟建農《紅色往事》，P.343。
- 35) 中共中央文獻研究室編《周恩來年譜（1949-1976）》中央文獻出版社，1997年5月，P.696。
- 36) 人間の本性は社会制度を超越して不変なものであるという考え方。巴人《論人情》（《新港》1957年第1期）や銭谷融《論“文学是人学”》（《文芸月報》1957年第5期）などが代表的である。反右派闘争で批判の対象となった。
- 37) 注7の翟建農《紅色往事》，PP.346-348。
- 38) 注7の翟建農《紅色往事》，P.348。
- 39) 《謝鉄驪，銭江給江青の第五封信》，吳迪編《中国電影研究資料：1949-1979》文化芸術出版社，2006年6月，PP.311-312。
- 40) 《江青，張春橋對謝鉄驪，銭江來信的批示》，吳迪編《中国電影研究資料：1949-1979》文化芸術出版社，2006年6月，P.311。
- 41) 《文化部核心小組給北影廠核心小組及全廠同志的信》，吳迪編《中国電影研究資料：1949-1979》文化芸術出版社，2006年6月，PP.312-313。
- 42) 《張春橋，江青對電影〈海霞〉的批示》，吳迪編《中国電影研究資料：1949-1979》文化芸術出版社，2006年6月，P.313。
- 43) 狄翟《〈海霞〉事件本末（下）》，《電影芸術》1994年第4期。
- 44) 注43。ただし，この部分は注5の《当代中国電影（上）》P.341では7月31日の政治局による上映許可の決定後，江青グループが撮影スタッフを編集室から追い出し，ネガとラッシュフィルムを持ち出し禁止措置にしたとある。
- 45) 《文化部核心小組給北影廠核心小組及全廠同志的第二封信》，吳迪編《中国電影研究資料：1949-1979》文化芸術出版社，2006年6月，P.314。
- 46) 江青が激怒した理由は主に二つあった。ひとつは劇中，党中央から石油労働者に毛沢東の著作『矛盾論』と『実践論』が送られる場面があるが，これはかつて劉少奇が行なったことであるので，劉少奇を美化しているとされた。またかつて油田開発は余秋里，康世恩が指揮したので修正主義者の功績を評価したものであるとされた。（園丁《圍繞影片〈創業〉和〈海霞〉風波》，《縱横》1999年第11期）
- 47) 張天民に毛沢東宛の手紙を書くようすすめたのは賀捷生であったという。（狄翟《〈海霞〉事件本末（下）》，《電影芸術》1994年第4期）
- 48) 《毛沢東論文芸（増訂本）》1992年8月，P.122。
- 49) 劉守華《電影〈海霞〉的曲折歷程》，《百年潮》2005年第3期。
- 50) 注49。
- 51) 周啓才《親歷1976年中央“打招呼”會議》，《世紀》2007年第6期。この事実は狄翟《〈海霞〉事件本末》および翟建農《紅色往事》に書かれていない。
- 52) 朱元石ほか《吳徳口述：十年風雨紀事》当代中国出版社，2008年6月，PP.145-146。
- 53) 注7の翟建農《紅色往事》，P.392。
- 54) 注7の翟建農《紅色往事》，P.392。
- 55) 国家廣播電影電視總局電影事業管理局党史資料徵集工作領導小組編《中国電影編年紀事（総綱卷）（上冊）》中央文獻出版社，2005年11月，P.593。
- 56) 園丁《圍繞影片〈創業〉和〈海霞〉風波》，《縱横》1999年第11期。
- 57) 注43。
- 58) 《江青在打招呼會議期間擅自召集的十二省，区會議上的講話記錄稿》，《“文化大革命”研究資料 下冊》中国人民解放軍，国防大学党史党建政工教研室，1988年10月。
- 59) 注43。
- 60) 注43。

- 61) 《〈四人幫〉是怎样利用五種芸術期刊搞陰謀文芸的》，《人民電影》1978年第4期。
- 62) 注4, P.142。
- 63) 王士根《“無産階級文化大革命”史／叙事／意識形態話語》，《当代電影》1990年第3期。
- 64) しかし映像には「三突出」を意識した部分も残る。たとえば、鎌を持って抵抗しようとする尤二狗に海霞が素手で挑む。鎌を持って抵抗しようとする中年男性に若い女性が素手で防ごうとし、海霞が尤二狗を一喝すると尤二狗がうなだれるというのは現実にはありえない。また映画の最後のキャストでは悪玉の名前は黒字、善玉は赤字で表示される。善玉、悪玉が一目瞭然であり、善玉に赤色、悪玉に黒色を多用した「革命模範劇」の影響が濃厚であると言える。
- 65) 拙稿「文革期文芸の一考察——『春苗』の書きかえを中心として」『京都産業大学論集』（人文科学系列 第42号）2010年3月を参照。

A Study of the Art and Literature during the Cultural Revolution

— Some problems concerning Haixia —

Satoko TSUJITA

Abstract

During the Cultural Revolution, the film industry was severely restricted. Almost all previous films were banned. Movie production revived after 1973 under the strict jurisdiction of the Gang of Four until 1976. Haixia was produced at this period and this script was written by Xie Tieli (1925-). The ministry of Cultural Affairs did not agree to release it and criticized Haixia for being against the creative writing principle of three saliencies. Finally the Political Bureau of CCPC agreed to release it. In this paper, I would like to reveal the policy of the art and literature during the Cultural Revolution by going through the process of producing Haixia.

Keywords: Haixia, Xie Tieli, Three Saliencies, Gang of Four, Cultural Revolution